



二 成長1

あたしは幼稚園に行くことになった。ママは、アームで服を着替えさせてくれたり、ハンカチやタオルを準備してくれた。同じマンションに住むお友達にも、一人に一台？ずつのドローンのママがいた。彼女？たちは、何かとあたしたち子どもの世話をしてくれた。

「準備できた？さあ、行きますよ」

ママの声が寝室から聞こえる。ベッドのシーツを整えているのだ。あたしが起きた後は、シーツはいつも大きく波打っているからだ。あたしは靴を履き、カバンを右肩から斜めに掛けると、マンションの玄関から奥に声を掛けた。

「行ってきまあす」

「ちょっと待ちなさい。奈保子。ママもすぐに行くから」

すると、他のドローンと一緒に女の子が廊下を走ってきた。

「待って。奈保子ちゃん。一緒に行こう」

同じマンションに住んでいる聖子ちゃんだ。

「おはようございます」

聖子ちゃんママが挨拶をする。

「おはようございます」

「おはようございます」

あたしとあたしのママも挨拶を返す。

聖子ちゃんは、前髪を一直線に揃え、おかつぱのようだけど、左右の髪の毛はくるりとカールしている。独特の髪型だ。みんなは、聖子ちゃんカットと呼んでいる。毎朝、朝シャンをすると、ドライヤーをかけて、カールが上手くできるように、時間をかけているそう。それに、毎日、服装も違っている。ピンク色で、フリルが付いているのが基本だけど、微妙に異なっている。髪

を整えたり、服を選ぶのに時間がかかって困るのよ、と聖子ちゃんママがあたしママに、一見、困ったようで、実は、自慢そうに話すのを聞いたことがある。だから、いつも遅刻ギリギリに家を出ることになる。

しまった。今日は家を出るのが遅かったのかな。聖子ちゃんに朝会うと幼稚園に遅刻するのかなといつもドキドキする。聖子ちゃんは遅刻を教えてくれる遅刻時計のようなものだ。髪の毛の話題に戻すと、あたしは面倒くさいので、前日に、髪を洗った後はそのままほったらかしだ。日によって、寝ぐせで、自然とカールができることがある。今日は、ちょうどその日だ。また、服も、ほとんど毎日同じだ。選ぶのが面倒くさいし、そんな時間があつたら、ベッドで転がっていたい。つまり、あたしは寝る子は育つグループの一員で、聖子ちゃんは飾る子は育つグループの一員なのだ。

「奈保子ちゃん。そのカール、可愛い。どうしたら、そんなに上手くカールが作れるの？」

髪に異常なほど執着する聖子ちゃんは、他人の髪型にも目ざとい。でもそれは、相手の髪型に気づくことによって、自分も、可愛い、と言ってもらいたいからだ。だから、あたしも、「聖子ちゃんも可愛いよ」とストーリー通りに答えてあげる。もちろん、その眼は聖子ちゃんの髪なんかは見えていない。もう、前を向いて、幼稚園の入り口に咲いている植木鉢の黄色や紫、赤色の花を想像している。

「さあ。行きましょう。遅れるといけませんよ」

ママがあたしたちを促す。

「ハイ」

返事だけは早い聖子ちゃんは、あたしの横をすり抜けてマンションの外に出ていた。その横には聖子ちゃんママも浮いている。

「早く行こうよ。奈保子ちゃん」

聖子ちゃんが後ろを振り向いた。髪の毛がふわっと揺れた。何を言ってんだい。遅いのはあんたの方じゃないの。と、心の中で毒づきながらも、聖子ちゃんのわざとらしい、小首をかしげた笑顔を見ると何も言えなくなる。

ママがアームを折り曲げて、自分の前で指を一本立てに伸ばす。それは、黙っておきなさい。口には出してはいけません。しっ、という合図なのだ。

ママはあたしの心の中まで読めるのだ。これは、長い間、と言っても、5年間、あたしが生まれてからずっとあたしのことを見守ってくれていたから、それとも、ママの脳の中に、あたしの心の中が読める機械が入っているのかもしれない。

あたしは大きく頷くと、後から来たのに追い越した聖子ちゃんの後姿を追った。

あの子は無事に幼稚園児になった。これまで5年間、育ててきたけれど、今のところ、問題はない。常に、あの子の行動や会話は入力し、そこから、あの子の感情や心の動きを推察し、次にどう対応すべきかを検討している。1日、1日の行動を入力し、他の子どもや、平均的成長モデルとも比較し、次に、何をすべきかを考えて、行動に移している。わからなければ、上に指示をもらったり、自らビッグデータを調べて、次なる行動に移している。

子育てがこれほど大変なことだとは知らなかった。ほとんどが、想定外、つまり入力データ外のことばかりだからだ。ただし、個の情報ではわからなくても、ビッグデータを活用すれば、たいいていのことは対応できているつもりだ。

おかげで、奈保子は問題なく成長を遂げている。安心だ。この感情も組み込まれたものだろうが、だが、かえって、安心を保証されたようで安心できる。あたしも人間に近づいてきたのかもしれない。

だが問題なのは、奈保子ではない。ママ友というのか、聖子ちゃんのママの方だ。奈保子ちゃんはいつも元気ですね、と愛想の言葉を発しながら、カメラの目はうちの子と自分の子を常に比較している。そして、自分の子の優越性を見つけようと躍起になっている。そんな表面上のママ友と行動を共にしないといけないのは非常に疲れる。

確かに、奈保子は聖子ちゃんと違って、社交的でもないし、口数も少ない。どちらかと言えば、口には出さずに、頭の中でよく考えるタイプなのだろう。だからと言って、奈保子が聖子ちゃんと比べて、決して劣っているわけではない。

でも、同じように私たちママドローンが育てているのに、なぜ、人間の性格や行動に違いが出るのだろうか。そう、これが個性の違いなのだろうか。その個性の違いの中で、ママドローンたちは、自分の子どもが一番だと考えている。もちろんそれは私だって同じだ。奈保子が一番だ。そう組み込まれているのだが。

聖子ママだけでなく、私も奈保子と聖子ちゃんと身長、体重、笑顔の多さ、会話の内容、利発さなどを比較し、優っている部分と劣っている部分を分析する。優っている部分はそのまま伸ばし、劣っている部分は致命傷なのか、まだ取り戻せる段階なのか、本来、それは比較の対象ではないもので、個性であるものか、を検討する。

もちろん、聖子ちゃんとだけではない。同じ幼稚園に通う、めぐみちゃんや真理ちゃん、蘭ちゃん、ミキちゃん、すーちゃんなどとも比較するし、街を散歩している時（もちろん、私は空中を浮遊しているのだが）も、常に、奈保子と同世代の子どもの成長が気になって仕方がない。

奈保子を始め、子どもたちの成長過程の情報は、全国的なビッグデータに毎日登録されており、いつでも自由に閲覧することができるのだが、やはり、情報だけでは自分の眼で実物を見ないと安心できない。この感情も私に組むこまれたものなのか。

ああ。とにく、奈保子が無事に幼稚園を卒園することを私は祈るだけだ。これだけ、統制化、管理化された社会においても、心配は尽きない。

安全・安心だけでは人は成長できない。他人との比較、競争は必要だ。だけど、多様性も人類を引き継いでいく手段、方法である。矛盾するようだが、矛盾ではない。ひとつ上の、アウフバーエンの段階なのだ。これまでもそうしてきたように、今後ともそうしていく。我々は画一を望まない。異なることで、新たな成長の種となり、芽が吹き、花を咲かすのだ。今のところ、我々の子どもたち順調に育っている。その個性を生かしながら、成長を促進させるためにも、部下のドローンたちにも、ある程度の自由度を与えなければならない。ただし、全ての情報は我々が把握する。